彙報

昭和五〇年六月より
昭和五一年五月まで

研究状況

班研究

東方部

先秦時代文物の研究　班長　林　巳奈夫

昭和五〇年四月より開始、五ケ年の計畫、班員は左記の通り。

相川佳予子、秋山進午、池田秀三、上山春平、江村治樹、尾崎雄二郎、川又正智、衣川强、桑山正進、小南一郎、近藤喬一、杉本憲司、曾布川寛、田中淡、永田英正、橋本敬造、樋口隆康、日比野丈夫、船越昭生、町田章、松原正毅、吉田光邦

研究は『周禮』の會讀と先秦文物關係資料の研究、紹介の二本立てで進める。『周禮』の會讀は、上記の期間中、大宰より醢人までを、小南・衣川・林・山本德子・池田が擔當した。その間、十月三日に江村が「侯馬盟書」の資料を紹介、その研究狀況についての報告を行ない、四月十六日には、吉川幸次郎氏の、經書としての『周禮』の特色とその傳承についての講話を聞いた。

漢書の研究　班長　吉川　忠夫

『漢書』のうちでもとくに志の部分を中心にして會讀譯注を行なってきた。そのうち「食貨志」「溝洫志」「律曆志」および「郊祀志」の譯を終り、その注を作成しつつあると同時に、班員の永田英正によって「食貨志」本文の校勘記が作られた。また「律曆志」の譯は川勝義雄と橋本敬造によって公刊された。現在は「五行志」を讀みすすんでいる。なお梅原郁の外國出張にともない、五一年度は吉川が班長を代行する。

博物志の研究　班長　山田　慶兒

『博物志』の佚文の收集および校訂を、五〇年の夏におえ、譯注も現在までに、全體の約八割をおえることができた。年度内には豫定どおり完了するみこみである。

また「科學者列傳の研究」の報告は、現在、原稿を作成中であり、近く出版できる豫定である。

中國中世の文化と社會　班長　川勝　義雄

五世紀から八世紀に至る中國の社會において、宗教的精神がさまざまの文化現象の根底に横たわっていることに注視して、第一年度にひきつづき、唐の道宣編『廣弘明集』を讀み進んできた。現在では、その卷二七に收められる南齊の竟陵王・蕭子良撰「淨住子」の譯注を完了して、卷二八「啓福篇」の會讀を續けている。

なお、當該時代の物質文化の諸問題や、比較思想史的見地からの研究として、左記の發表が行なわれた。

五〇年十一月五日　法隆寺所藏四騎獅子狩文錦の製作(1)　桑山　正進

五一年二月四日　佛教の比較思想史的考察　山下　正男

五一年五月十二日　六朝唐代の壁畫に見えたる建築　田中　淡

晚唐文學　班長　荒井　健

本研究では晚唐の詩人、李商隱を對象としてとりあげた。底本には錢謙益寫校本影印版を用い、『文苑英華』等を校勘の資料とし、七絶の部分の會讀を進めてきた。五〇年四月の研究班發足以來一年あまり、現在「霜月」以下二五篇を一應讀了した。

朱子語類の研究　班長　山田　慶兒

過去五年にわたる朱子研究班は朱子語類研究班に發展的に解消し、目下、班員各氏による論文準備と並行して、讀了分の譯注を所内班員各位の協力を得て進めつつある。卷一（理氣）、卷三（鬼神）は完了、いま卷二（天文地理）が着々と進行しつつある。なお五〇年十二月八日に、福永光司氏による研究報告「道學と道教と道家」を行なった。

中國佛教史學史の研究　班長　牧田　諦亮

昭和五〇年四月からの會讀は、宋の贊寧撰の『大宋僧史略』三卷を對象とし、班員の協力によって譯注を年度内に完成し、昭和四七年以來の中國佛教史學史の研究の報告とする。附帶して進行中の中國高僧傳索引も第五卷（宋高僧傳索引上）

を五一年三月に完成した。

近世中國の歴史地理學的研究　班長　日比野丈夫

「天下郡國利病書の研究」は、昭和五〇年三月末に一段落ついたものとして、その後は研究成果の整理と班員各自の論文作成に從事し、報告書として出版する準備を進めている。併せて四月から表記新題目のもとに、宋代より清代にいたる一貫した歴史地理學的諸事象をとりあげ、その問題點を追求することとした。

明清社會の變革に關する研究　班長　小野　和子

本研究は、明清時代を、政治・社會・經濟・思想・文化の各方面から總合的に研究し、その社會變革の過程を歴史的にあとづけようとするものである。當面は、明清時代を全般的にとりあつかうが、徐々に焦點を明末清初にしぼってゆく豫定である。月一回、研究報告をおこなうとともに毎週一回（水曜日一時半～五時）、『皇明經世文編』の會讀をおこない、あわせて『雍正硃批諭旨』の資料整理をもおこなっている。

清代經學の研究　班長　尾崎雄二郎

東方部助手會の會讀を引きついで研究班とした。顧炎武『日知錄』三十二卷本を、その初めから讀む。『集釋』に替えて注を書く氣持がある。第一年度の非常勤講師には、福本雅一氏を依頼した。

五四運動研究　班長　森　時彦

『解放與改造』『建設』のあと、『國民』『中國農民』『曙光』『甲寅雜誌』『孔教會雜誌』『前鋒』『少年』『赤光』『小說月報』『共產黨月刊』等の紹介・評論によって、五四時期の諸思潮を跡づける作業を續ける一方、「パリ講和會議における人種案と山東問題」「留佛勤工儉學運動」「李大釗について」「國故整理運動」「清末の保守主義」「帝國主義と中國關稅制度」「五四前後の日本外交」等の研究報告が行われた。

また、J. Cheseneaux "Le mouvement ouvrier chinois de 1919 à 1927", E. Rhoads "China's Republican Revolution" の書評も織りまぜ、論文集作成への準備も軌道にのりはじめている。なお、今年度の非常勤講師は松本英紀氏にお願いしている。

現代中國の政治過程と民衆の意識　班長　竹内　實

研究報告をつぎのようにおこなった。

六月十日　文化大革命の體驗　鹽見敦郎

六月二十四日　「毛澤東・文化大革命を語る」書評　茂木信之

九月三十日　文革後の文學狀況　吉田富夫

十月十四日　婚姻法・人民公社・文化大革命――婦人の解放をめぐって――　小野和子

十月二十八日　王アンナ「革命中國に嫁ぎて」書評　吉田富夫

十月十四日　M. Oksenberg ほか "The Chinese Political Spectrum" 紹介と批評　森　時彦

十月二十八日　アメリカの中國政策――一九四五～七二年　守川正道

十一月十一日　上海〝一月革命〟をめぐって　矢吹　晉

十一月二十五日　中國における宗教　牧田諦亮

一九七六年

一月二十七日　浩然の作品と北方語彙　阿賴耶順宏

浩然の「艶陽天」について　深澤一幸

四月二十七日　毛澤東著作年表について　中村公省

五月十一日　現狀分析　深澤一幸　北村稔　竹内實

五月二十五日　毛澤東文獻研究の現狀　竹内　實

漢籍委員會　委員長　尾崎雄二郎

毎週一回の委員會で整理業務の處理を行なっている。

類目委員會　委員長　勝村　哲也

東洋學文獻類目の編纂は、一九六五年（昭和四〇年）からは、本所附屬の東洋學文獻センターが中心となり、所内より、協力を得て進められて來たが、一九七〇年四月より、新たに類目委員會が發足して編纂を擔當することとなり、所内よりの協力體制が一そう強化され、内容の充實が期待さ

れるに至った。毎週一回、定期的に會合して、編纂のための共同作業を實施している。一九七三年度版を昭和五〇年九月に出版した。ひきつづき一九七四年度版を印刷中である。

日本部

一九三〇年前後の政治と社會　班長　井上　清

この研究班は日本資本主義の危機が深化する一九三〇年前後を對象として、當時の政治・社會・思想・文化狀況を總合的に究明することを目的としている。今期は最終年度にあたり、報告書作成にむけて研究・討論をつづけてきた。七六年三月で一應研究會は終了し、現在各人が論文執筆中である。

日中戰爭期の政治と社會　班長　井上　清

この研究班は七六年四月より、前期「一九三〇年前後の政治と社會」研究班をひきついで發足し、「滿洲事變」以降、日中戰爭の全面的擴大、太平洋戰爭へいたる時期を對象として、その對內外政策、社會、思想狀況、民衆動員の展開などを總合的にあきらかにすることを目的としている。

社會運動の研究　班長　渡部　徹

七三年四月からの、主として兩大戰間の內外の社會運動の實態分析を繼續し、七六年度よりの三カ年で成果をまとめる豫定。

日本における市民文化の形成—(文明開化の研究)　班長　林屋辰三郎

幕末文化の研究を終了し、七六年四月より第三期文明開化の研究に入った。文明開化の研究はたんに時期を文明開化期にしぼらず、いわば本研究班の歩みを總括する意味を含めて、江戸時代末期から明治中期までを扱う豫定である。現在三名の外國人研究者も含めて、すこぶる國際色豐かな研究會が續いている。なお幕末文化の研究は七月に原稿を締切り、早期刊行をめざしている。

日本帝國主義の朝鮮支配　班長　飯沼　二郎

この研究班は七六年四月より發足し、おもに一九一一年朝鮮併合以降の日本帝國主義の朝鮮にたいする植民地支配の形成と實態、およびそれに對する朝鮮民衆の民族解放の鬪爭の過程を諸側面から究明しようとしている。

家族問題の研究　班長　太田　武男

この研究は、夫婦・親子・相續などをめぐる諸問題に關する理論的・實證的研究を、その主たる目的ないし內容とする。從來、この方面の研究は、それぞれの專門分野において個別的に行なわれていたが、今回の研究は、法律學的な觀點からの考察を中心としつつも、それに社會人類學的な觀點からの考察などをも加えて、總合的に行なわんとする點において特徵的である。昭和四一年四月より毎週一回研究會を開いて、主として夫婦問題、なかでもとくに「離婚問題」について研究をすすめ、その成果は『現代の離婚問題』(有斐閣)として世に送り、また、昭和四四年四月からは、主として親子問題を中心に研究を進め、その成果は、『現代の親子問題』(有斐閣)として世に送った。そして、昭和五〇年四月より第三期に入り、現代の相續問題、なかでも遺言制度ないし遺言をめぐる諸問題についての總合的な研究を行なっている。

現代都市の研究　班長　太田　武男

この研究は、現代都市のもつ問題を多樣な視野から明らかにするのが目的であるが、當面のところ、對象を京都市にしぼり、以下のような一連の調査を實施した(一部は計畫中)。①市民を對象としたいわゆる市民意識調査、②市會議員調査、③市職員意識調査、④町內會、町內會長調査、⑤各種團體調査。これらのデータを素材として、京都市の政治・行政過程を考察する。

西洋部

フランス第二帝政期の研究　班長　河野　健二

第二帝政の研究は近年とみに盛んになっている。それはこの時代が直面した諸々の問題が、現代という我々の時代の問題に直接つながり、その意味でゆたかな示唆をもつということが再認識されたためであろう。政治・社會・經濟そして文化等々の多面的な研究を完了し、現在報告書を作成中である。

一九三〇年代のヨーロッパ　班長　河野　健二

三〇年代が現代史においてもつ重要性は廣く知られるところである。そしてこの時代は諸々の意味で今日の我々の有樣に密につながっている。就中、經濟史的にみてそれは今日の高度消費型社會の到來を告げる時代であった。絕望と希望とが奇妙に入り雜った三〇年代ヨーロッパを經濟、政治

その他から多角的に研究中である。

前近代社會における社會動態　班長　會田　雄次

五一年三月で、前近代における知識人層と社會との相關を探る研究會は一應解散し、四月からは新たに前近代の社會動態が討論されることになった。前近代では知識がそれ自體として自立していないため、研究班では知識人層はかなり廣い概念で理解され、さまざまなケース・スタディが檢討された。成果を公表すべく努力中である。新研究班では、傳統的・固定的とみなされがちな社會內での流動的要素を摘出し、柔軟な社會論を創出すべく努力中である。さしあたっては、理論的一致點を見出すために、從來までの社會移動論を再檢討中である。

人文學の方法　班長　上山　春平

前年度の西洋近世論理思想の研究會は五〇年十一月をもって終了し、班員は各々テーマを選んで論文執筆に入った。

五一年四月より新たに始まった人文學の方法に關する研究班は、當面歷史學の方法論を中心テーマとし、手始めにC・S・パースの歷史哲學の構想を檢討している。

ボードレール・惡の花　註釋　班長　多田道太郎

既に發表した『藝術詩篇註釋』の相互批判を續けてきたが間もなく終わる。戀愛詩篇は「猫」まで進み、あと五篇でジャンヌ・デュヴァル詩篇を讀み終える。十一月よりイヴ＝マリ・アリウ研修員が參加している。

社會編成の比較人類學的研究　班長　谷　泰

社會人類學は、これまで、出自集團とか親族といった基礎的な集團を「構造」として研究してきた。社會構造は理論的な分析概念としても、また經驗的に把握することのできる實在的なものとしても、多義的に用いられてきた。しかし、最近になって、研究が多面的に發展してくるに從い、基礎集團を「構造」として把握する立場の限界が明らかになってきた。本研究班は、新たに、社會的諸集團が個人や小集團を軸として、發生的にどのように編成されているのかを追求する。個人間の對面行動や近接行動などが、社會關係行動を編成してゆく過程を、いくつかの異なる文化の事例をとりあげて比較し、社會的諸集團の編成原理を導き出すことによって、社會人類學の古典的課題に新しい光を投げかけることを目指す。

人類學における方法論の研究　班長　谷　泰

人類學は、生物種である人類が、多樣な自然環境の中で、極めて多樣に分化した生活樣式を營んでいる、その諸側面を綜合的に把握することを目指している。そのため、人類學の方法論は非常に多樣である。本研究班は、これらの諸方法を自覺的にとらえ直し、新しく用いられるようになった生態人類學、エスノサイエンス、言語分析等の方法の現實への適用可能性、有效性と限界の檢討をおこなっている。この成果の上にたって、現實の調査結果に對して廣い適用範圍をもった、精密な分析方法の洗練を試み、新しい方法論上の視座を構築してゆきたい。

個人研究

東方部

中國運河史の研究　日比野丈夫
貴族制社會とその文化　川勝　義雄
毛澤東の思想　竹內　實
中國音韻史の研究　尾崎雄二郎
殷周文物の考古學的研究　林　巳奈夫
禪宗文獻の研究　柳田　聖山
中國の詩學　荒井　健
宋代の開封と臨安　梅原　郁
宋代の科學と技術　山田　慶兒
六朝隋唐精神史　吉川　忠夫
隋唐社會史研究　礪波　護
中國中世土地所有制の研究　勝村　哲也
中國近代婦人解放史　小野　和子
白氏文集語彙索引の編集　今井　清
宋代思想史　三浦　國雄
唐宋繪畫史の研究　曾布川　寛

日本部

日本帝國主義の研究　井上　清
變革期における歷史と文化　林屋辰三郎
日本勞働運動史　渡部　徹
家族法の研究　太田　武男
横井時敬の研究　飯沼　二郎
日本技術史の研究　吉田　光邦

日本近代文化史の研究　飛鳥井雅道
日本ファシズムの研究　古屋　哲夫
日本帝國主義の研究　副島　圓照
寛永文化の研究　熊倉　功夫
文化史および文明史としての國民國家の形成　横山　俊夫

西　洋　部

世界資本主義の構造　河野　健二
ヨーロッパ15・16世紀の社會と思想　會田　雄次
人文科學の方法　上山　春平
ルソーの政治思想について　樋口　謹一
宗教改革と政治・社會　中村賢二郎
ボードレールの〝脱出〟について　多田道太郎
西洋論理思想史　山下　正男
人間關係行動の比較分析　谷　泰
フランス社會主義思想の研究　阪上　孝
モデル理論とその應用　内井　惣七
シュメール都市の比較類型論的研究　前川　和也

東方部研究會

五〇年
五月一四日　漢代の飲食　林　巳奈夫
朱門弟子師事年攷續　田中　謙二
五月二一日　漢武帝内傳の成立（上）　小南　一郎
五月二八日　高僧傳の成立　牧田　諦亮
婚姻法貫徹運動をめぐって　小野　和子
六月四日　梁武の蓋天說　山田　慶兒
宋初の寄祿官とその周邊　梅原　郁
九月一〇日　訪中報告　田中　淡
五一年
一月二一日　訪中報告　吉川　忠夫
勝村　哲也
小南　一郎
三月四日　山田論文「梁武の蓋天說」批評　御牧　克己
三月一七日　牧田論文「高僧傳の成立」批評　夫馬　進
田中論文「朱門弟子師事年攷續」批評　池田　秀三
三月二四日　小南論文「漢武帝内傳の成立（上）」批評　茂木　信之
梅原論文「宋初の寄祿官とその周邊」批評　日比野丈夫
三月三一日　林論文「漢代の飲食」批評　勝村　哲也

事業概況

夏期講座　「原典を讀む」　於　分館講堂
五〇年八月
一日　「南方錄」　熊倉　功夫
坂本龍馬「新政府綱領」　飛鳥井雅道
二日　「尚書」洛誥篇の注釋　小南　一郎
「大學」の解釋　島田　虔次
三日　ボードレール「惡の花」　松田　清
初期「救貧法」の原資料　中村賢二郎

開所記念公開講演會　於　分館講堂
五〇年一一月八日
大正初期の勞働組合觀　大前　眞
ルソーの友情について　樋口　謹一
文字と左ききき　尾崎雄二郎

學術講演會　於　本館會議室
五一年二月七日
Mersenne and the 17th Centnry
—Problem of Scientific Acceptability—
オクスフォード大學教授　A. C. Crombie

定年退官記念講演會　於　分館講堂
五一年三月二六日
父母恩重經の話　牧田　諦亮
俗語と文言とのあいだ　田中　謙二

所員動靜

○林巳奈夫助教授（東方部）は教授に昇任（五〇年七月一日付）。
○勝村哲也氏を助教授（附屬東洋學文獻センター）に採用。
○松原正毅講師（西洋部）は國立民族學博物館助教授（第二研究部）に昇任（以上五〇年一〇月一日付）。
○島田虔次教授は文學部に配置換、當研究所教授に併任（五〇年一〇月一六日付）。
○池田秀三氏を助手（附屬東洋學文獻センター）

に採用。
○御牧克己氏を助手（東方部）に採用（以上五〇年一二月一日付）。
○野村雅一助手（西洋部）は、辭任の上、南山大學文學部講師として轉出（五一年三月三一日付）。
○小南一郎助手（東方部）は文學部助教授に配置換。
○樺山紘一助手（西洋部）は東京大學文學部助教授に配置換。
○田中謙二・牧田諦亮兩教授（東方部）は停年退官。田中教授は名譽教授に、牧田教授は名譽所員に。
○柳田聖山氏を教授（東方部）に採用。
○阪上　孝氏を助教授（西洋部）に採用。
○松井　健氏を助手（西洋部）に採用（以上五一年四月一日付）。
○藪内　清名譽教授は勳二等に叙せられ、瑞寶章を授けらる（五〇年四月二九日）。
○岩村　忍名譽教授は勳三等に叙せられ、旭日中綬章を授けらる（五〇年一一月三日）。
○多田道太郎助教授は、七月五日羽田發、ホノルルの東西コミュニケーション研究所で比較民衆文化に關するセミナーに出席、八月三日歸國。
○谷　泰助教授（西洋部）は七月一七日羽田發、イタリア中部アブルッツオおよびリビア・フェザンにおいて、「地中海文化圏の社會と文化」調査隊の一員として、牧畜文化の比較研究に從事、九月二五日歸國。
○樺山紘一助手は、八月五日羽田發、パリ・コルドバ（スペイン）・フェズ（モロッコ）・ローマ周邊等で「地中海文化圏の社會と文化」調査隊の一員として調査を終え、一〇月二日歸國。
○田中　淡助手は、八月五日羽田發、中國建築學會に出席、故宮博物館・大同・太原・上海大學等で古代建築の視察及び意見交換を終え、同月一九日歸國。
○多田道太郎助教授は、九月一二日羽田發、メキシコシティ・リマ市内・ブェノスアイレス市内・ブラジリア市内・サンフランシスコ市内等で中南米都市における戸外空間調査（豫備調査）を終え、一〇月二二日歸國。
○河野健二教授は、九月一二日新潟空港發、モスクワのソ連科學アカデミーで日ソ經濟學者シンポジウムに出席し、同月二五日歸國。
○野村雅一助手は、一一月一七日羽田發、フランクフルト周邊・マンハイム・ウィーン・ローマ周邊等で地中海文化圏の社會と文化の調査を終え一二月一九日歸國。
○吉川忠夫・勝村哲也助教授、小南一郎助手は、五〇年一二月一九日伊丹發、上海圖書館・陝西省博物館・北京大學等で研究視察を終え、五一年一月八日歸國。
○井上　清教授は、一月五日伊丹發、北京大學において日本近代・現代史に關する講義及び研究資料蒐集のため滞在、六月末日歸國豫定。
○梅原　郁助教授は、一月二七日羽田發、プリンストン・ロンドン・ミュンヘン・パリ大學、アテネ・エジプト・イラク・イラン國立博物館等で中國宋代史研究及び資料蒐集、五二年一月下旬歸國豫定。
○飯沼二郎教授は、三月七日羽田發、ウィン大學日本文化研究所・ブタペスト農業博物館等で研究資料蒐集、リーデング大學で第四回國際農業博物館會議に出席、四月一四日歸國。
○本學研修員規程により、本研究所において研修する外國人研修員とその題目は次のとおりである。

林　潔　明（香港中文大學助理研究員）
中國古文字學の研究　指導教官　尾崎教授
期間　五〇年五月～同年一〇月

John David Pierson（イリノイ大學文學部助教授）
德富蘇峰の思想形成とその展開過程の研究　指導教官　吉田助教授
期間　五〇年九月～五一年五月

Jerry K. Dusenbury（ハーバード大學大學院生）
中江兆民の研究　指導教官　飛鳥井助教授
期間　五〇年七月～五一年六月

David John Boggett（ジャーナリスト、「Ronin」編集者）
東南アジア及び東アジアへの中國科學技術のインパクト　指導教官　山田助教授
期間　五一年二月～五二年一月

Allioux yves Marie（フランス國立科學研究所）

日本近代文學　指導教官　多田助教授
期間　五〇年一〇月～五一年九月
Michel Strikmann（フランス國立高等研究院第五部研究員）
六朝時代の宗教と社會　指導教官　川勝教授
期間　五〇年一一月～五一年一〇月
Charles R. Backus（プリンストン大學大學院生）
南詔國と唐朝の關係　指導教官　礪波助教授
期間　五一年五月～同年七月
Louise Cort（ハーバード大學フォッグ美術館學藝員）
日本近世における藝能と工藝　指導教官　林屋教授
期間　五一年四月～五二年三月
郭麗英
般若思想の研究　指導教官　柳田教授
期間　五一年五月～五二年四月
○客員教授
Richard Joseph Pearson
東アジア文化の考古人類學的研究
期間　五〇年一〇月～五一年三月

出版物

紀要

人文學報　第四〇號（紀要第七二冊）
五〇年一二月一五日刊
人文學報　第四一號（紀要第七三冊）
五一年三月三一日刊
東方學報　第四八冊（紀要第七一冊）
五〇年一二月一〇日刊

研究報告その他

東洋學文獻類目　一九七三
五〇年九月三〇日刊（附屬東洋學文獻センター編）
疑經研究　牧田諦亮著
五一年三月三一日刊
元曲選釋　第三集
五一年三月三一日刊
Kyoto University African Studies Vol. 10
（京都大學アフリカ學術調査報告）
五一年三月刊
化政文化の研究　林屋辰三郎編
五一年三月一二日（岩波書店）刊